

e-ラーニングの活用による授業の省察力育成を目指した 大学模擬授業のシステムの構築

— 学内附属施設との連携を通して —

The construction of an e-learning-based self-reflection and evaluation system in teacher training through cooperation with attached facilities

鬼澤陽子¹⁾ 藏原三雪²⁾ 笹本重子²⁾
山梨雅枝³⁾ 岡島彩映⁴⁾

Yoko ONIZAWA, Miyuki KURAHARA, Shigeko SASAMOTO
Masae YAMANASHI and Sae OKAJIMA

Abstract

The purpose of this study was to construct a system to learn self-reflection and evaluation of teaching behavior in teacher education during the academic years of 2009 and 2010. Two classes, Teaching Methods in Health and Physical Education II and Instructional Planning, Methods and Assessment Seminar were utilized to support the e-learning self-reflection and evaluation system. 514 participating university students were divided into two groups: 2010 academic year (n=244) and 2011 academic year (n=270).

The main findings are summarized as follows:

1. Teaching Methods in Health and Physical Education II and Instructional Planning, Methods and Assessment Seminar were utilized to practice self-reflection and evaluation as well as lesson planning and practice.
2. It was possible to enrich teacher education by cooperation with attached facilities (a library, an information processing center, etc).
3. E-learning based self-reflection and evaluation employing duration recording, teacher interaction recording, and reflection sheets, helped students assess their performance and develop new ideas.

Therefore, the construction of an e-learning-based self-reflection and evaluation system produced improvement in reflection skills on teaching.

Keywords: teacher education, lesson planning, improvement of teaching skills, assessment methods

I. はじめに

2006年7月に出された中央教育審議会答申において、教員養成・免許制度の改革における具体的方策の1つに「教職課程の質的水準の向上」が示された。こ

のことは、教員として最小限必要な資質能力を確実に身に付けさせることが大学の教職課程での役割であるという指摘である。なかでも、実践的指導力を育成するためには、授業における指導行動を評価して、教師自らの指導技術を反省すること（省察）がきわめて重要だといえる。

授業を省察する力をつけるための取り組みには、フィールドノートを活用したり、授業を撮影したり、焦点をしばった授業観察や授業分析、授業後の研究討議等、さまざまなものがある（長谷川，2010）。授業

1) 日本女子体育大学（非常勤講師）
群馬大学教育学部（講師）

2) 日本女子体育大学（教授）

3) 日本女子体育大学（非常勤講師）

4) 目白研心中学・高等学校（非常勤講師）

分析を用いて省察する代表的な方法として、(1) 授業を組織的に観察する：授業を撮影しながら、組織的観察法による客観的なデータを作成し省察に利用する方法、(2) リフレクションシートを活用する：計画した指導案、実際の授業に関する情報を総合的に評価する方法があげられる。

本学においては、これらを含めた中学校・高等学校の体育に関する指導法に関する内容について、教職科目「保健体育科教育法Ⅱ」(4単位)で取り上げている。この「保健体育科教育法Ⅱ」が位置づく「教育課程および指導法に関する科目」は、「各教科の指導法」、「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む)」を含めることが教育職員免許法施行規則(第6条)で定められている。

また、実践的教職科目として「教育実習(教育実践研究を含む)」:「教育実習」4単位および「教育実践研究」1単位が開設されている。「教育実践研究」は、2年次後期～4年次前期にわたり、教育実習の事前事後指導を含めて15回実施される。教育実践研究の1つの課題として、「学校見学(体育授業の見学)⁽¹⁾」を課しているものの、教育実習の前段階として学校現場での体育授業を実際に見学する回数も限られており、スクールボランティアやインターンシップのような教師として経験する機会を豊富に提供することが難しい状況にあるため、大学での模擬授業の持つ役割は大きいと考える。さらに、本学では各学年約300名の教職履修者がいることから、より一層の工夫が求められる。体育における模擬授業は、各大学においてさまざまな取り組みが報告されているものの(長谷川・岡出・高橋, 2001; 日野, 2002; 小松崎, 2007; 向山・山崎, 2002)、これほどの受講生の規模において実施している報告は見当たらない。ちなみに、平成23年度公立学校教員採用選考試験においても人物を重視し、優れた人材を確保するための採用選考方法の1つとして、全64区市のうち52区市が「模擬授業」、41区市が「場面指導」、23区市が「指導案作成」を導入している(文部科学省, 2010)。

そこで本研究では、「理論的側面」だけではなく、「実践的側面」からの教員養成機能の強化を図るために、2009年度～2010年度にかけて「授業の省察(分析・評価)」に重点を置いた模擬授業の実践に力を入れ、そのためのシステムを構築することを目的とした。具体的には、①教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅱ(講義形式)」と「教育実践研究(実践形式)」

との連携を図るとともに、②e-ラーニングの活用を含めた授業の省察(分析・評価)の仕組みづくりを目指したものである。

Ⅱ. 研究の方法

1. 対象

対象は、「保健体育科教育法Ⅱ」と「教育実践研究」のいずれも受講している学生とした。2009年度は270名、2010年度244名であった。なお、「教育実践研究」は専攻を踏まえて4クラス編成とした。

2. システム構築の手続き

2009年度は、①教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅱ」と「教育実践研究」との連携を図ることで、授業を「(1)設計」して「(2)実践」することに加えて、「(3)省察(分析・評価)」する授業づくりの3ステップを新たに位置づけようとした。さらに、授業づくりの充実を意図して、附属施設(図書館、情報処理センター)との連携を図った。そして2010年度は、よりよいものにするために課題点を修正し、改善を図るようにした。

3. 教育実践研究の位置づけ

「教育実践研究」は教職履修者の必修科目であり、2008年度までは1回の模擬授業が実施されてきた。しかし、専攻によっては、この科目での授業実践が唯一の場となることから、より効果的な模擬授業の進め方を探ることにした。

4. 分析方法

授業時間外の学びとしてe-ラーニングを活用することが受講者に受け入れられるかどうかを検討するために、4項目のアンケート調査を実施し(表1)、集計した。

問3-2の自由記述については、意味内容のまとまりで区切った。それらを分類するにあたり、次のカテゴリーを設定した。まず、省察の観点として「A学習内容(取り上げた指導内容は適切で、それに対応した学習活動であったか)」、「B授業展開(授業

は計画的で効率的に進められていたか)、「C教師行動(教師の言動は的確で豊かであったか)」(小松崎,2010,p.268)を設定した。「C教師行動」については、下位カテゴリーとして四大教師行動(高橋,2010)と言われる「aインターアクション」「bマネジメント」「cインストラクション」「dモニタリング」に加え、教師としての基本的な要因と考えられ

る「e声の大きさ」「f学習者への理解」を設定した。この他、幅広い観点から捉えているものを「D全体」とし、下位カテゴリーとして「g新たな発見」「h改善策(課題に対する改善策)」を設定した。

なお、分析は体育科教育学を専門とする1名が行った。

表1 アンケート用紙

問1	授業を振り返るために、授業映像を見ることは有効だと思いますか。	有効だと思う／有効だと思わない
問2	今回、実際にe-ラーニングを活用して授業映像を視聴しましたか。	視聴した／視聴しなかった
問3-1	問2で「視聴した」と回答した人に質問です。 授業映像を視聴して新たに気づいたことや発見したことはありましたか。	あった／なかった
問3-2	問3-1で、新たに気づいたことや発見した内容はどのようなことですか。	
(自由記述)		

Ⅲ. 結果と考察

1. 模擬授業の概要

1) 模擬授業について

授業づくりには、授業を「(1)設計」して「(2)実践」することに加えて、「(3)省察(分析・評価)」するという3つのステップが重要である。これらを有機的に連動させるために、附属施設との連携を図りながら、模擬授業のシステムの構築を図った。表2に授業づくりの3つのステップからみた仕組み・手だてを、表3には授業を展開するための仕組み・連携を示した。

(1) 授業の「設計」段階

授業を「設計」する段階においては、学生が自由に集まれる教室の確保や授業づくりに必要な物品の貸し出し(教務課の協力)、そして、附属図書館との連携を図り、授業づくりに関する資料のより一層の充実を図った。なお、「e-ラーニング」の使い方や授業づくりに関する指導は、「保健体育科教育法Ⅱ」を中心に行った。

(2) 授業の「実践」段階

授業の実践においては、全専攻共通の必修の教職科

目である「教育実践研究(4クラス編成)」で行い、1クラス約80人を2つに分け、約40人をさらに6~7人ずつ×6つのグループに分けた。グループごとに教師役、観察役、生徒役を担当し、各クラス3回ずつ模擬授業を実施した。そのうち、1回は教師役もしくは観察役を分担し、残り2回は生徒役となるようにローテーションを組んだ(4クラスで全24回の模擬授業)。なお、模擬授業は、1クラスあたり2授業同時に展開し、1クラスあたり2名の教員で指導した(計8人、うち体育科教育学を専門とする教員1人)。

教師役グループ(6~7人)は、50分の授業を「はじめ」「なか」「まとめ」の3人で担当し、この他のメンバーは、ビデオ係と教師役の補助をした。観察役グループは、組織的観察法として、①期間記録法:教師による授業場面の運営方法や時間配分を把握し、その原因や改善策を省察する授業分析法と、②教師の相互作用行動観察法:教師による言葉かけの回数と内容を省察する分析法を用いた。

(3) 授業の省察(分析・評価)段階

「教育実践研究」では、50分の模擬授業終了後に教師役、観察役、生徒役のそれぞれの視点から授業を反省的に振り返る時間を設定した。そこでの反省を踏まえて、後日、各自の空き時間を利用して模擬授業の映

像を視聴させるために、「e-ラーニング」を活用することにした。情報処理センターとの連携を図り、ビデオ係が撮影した映像を学内サーバーにアップロードし（編集なし）、学内のLANに接続しているパソコンであれば自由に視聴できるようにした。観察役グループは組織的観察法の記録を確認するとともに、教師役、

観察役については、授業実践を通して「ねらい」とした事柄がどの程度実現されたのかを授業映像を見ながら検討し、リフレクションシートを作成することを課題とした。また、他のクラスの模擬授業も視聴できるようにすることで、授業の「設計」段階にも活用することを期待した。

表2 授業づくりのステップからみた仕組み・手だて

	授業づくりのステップ		
	(1)「設計」段階	(2)「実践」段階	(3)「省察（分析・評価）」段階
マイクロティーチング	<ul style="list-style-type: none"> ◇保健体育科教育法Ⅱ <ul style="list-style-type: none"> ・マイクロのねらい・流れを説明 ・課題提示 ・前年度のマイクロの映像を見せる ・授業を省察する意味 ・ビデオカメラの撮影の仕方 ・授業撮影の許可 ◇授業外の学び <ul style="list-style-type: none"> ・3分間のシナリオを作成する 	<ul style="list-style-type: none"> ◇教育実践研究／◇保健体育科教育法Ⅱ <ul style="list-style-type: none"> ・3分間の学習指導 <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価→提出 ・他者評価：生徒役による評価→提出 	<ul style="list-style-type: none"> ◇保健体育科教育法Ⅱ <ul style="list-style-type: none"> ・提出された各種授業分析シート・振り返りシートを返却し、各自の課題を再確認させる ・自分の教師役映像の閲覧希望者にはDVテープの貸し出し
	<ul style="list-style-type: none"> ◇保健体育科教育法Ⅱ <ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業のねらい・流れを説明 ・学習指導案の考え方、書き方の説明 ・学習指導案の作成→相互評価→修正 ・模擬授業の班分け・役割、学年・種目の指定 ・授業を省察する意味・方法 ・授業分析法 <ul style="list-style-type: none"> 1) 期間記録法 2) 教師の相互作用行動の観察法 3) リフレクションシート ・ビデオカメラの撮影の仕方 ・e-ラーニングの閲覧方法 ・授業撮影の許可 ◇授業外の学び <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導案・授業資料の作成 ・学習指導案の印刷・提出 ・授業で使う準備物の申請 	<ul style="list-style-type: none"> ◇教育実践研究 <ul style="list-style-type: none"> ・50分の模擬授業 ・教師役・ビデオ撮影 ・観察役 ・生徒役 ◇教育実践研究 <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価 ・他者評価①：生徒役による評価 （他者評価②：観察役による授業分析） 	<ul style="list-style-type: none"> ◇自学 <ul style="list-style-type: none"> ・e-ラーニングを閲覧する ・教師役：ねらいとした事柄がどの程度実現されたのかを確認・検討し、リフレクションシート作成→提出 ・観察役：授業分析を記録・確認し、リフレクションシート作成→提出
模擬授業	<ul style="list-style-type: none"> ◇保健体育科教育法Ⅱ <ul style="list-style-type: none"> ・提出された各種授業分析シート・リフレクションシートを返却し、各自の課題を再確認させる 		

表3 授業を展開するための仕組み・連携

教育実践研究	保健体育科教育法Ⅱ			保健体育科教育法Ⅱとの連携をはかるために		
	事前指導	事後指導	教育実践研究担当者の打合せ	助手による協力	情報処理センターとの連携	図書館との連携
マイクログ ティーチング	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前指導 <ul style="list-style-type: none"> ◆マイクログのねらいと流れを説明 ◆課題提示 ◆前年度のマイクログの映像を見せる ◆授業を省察する意味 ◆ビデオカメラの撮影の仕方 ◆授業撮影の許可 ◆事後指導 <ul style="list-style-type: none"> ◆生徒役による評価シートを返却し、各目的の課題を再確認させる 		<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ (教員用配布資料作成) ◆マイクログのねらいと流れを説明 	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ (助手用配布資料作成) ◆マイクログのねらいと流れを説明 ◆ビデオカメラの使い方の説明 ◆授業時 ◆ビデオカメラの撮り方のサポート 		<ul style="list-style-type: none"> ◆ビデオカメラの貸し出し
	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前指導 <ul style="list-style-type: none"> ◆模擬授業のねらいと流れを説明 ◆学習指導案の考え方、書き方の説明 ◆学習指導案の作成→相互評価→修正 ◆模擬授業の班分け・役割、学年・種目の指定 ◆授業を省察する意味・方法 ◆授業分析法 ◆事後指導 <ol style="list-style-type: none"> 1) 期間記録法 2) 教師の相互作用の観察法 3) リフレクションシート ◆ビデオカメラの撮影の仕方 ◆e-ラーニングの閲覧方法 ◆授業撮影の許可 ◆事後指導 <ul style="list-style-type: none"> ◆提出された各種授業分析シート・リフレクションシートを班ごとに印刷し、保体Ⅱの受講日に本人へ返却 	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ (教員用配布資料作成) ◆模擬授業のねらいと流れを説明 ◆授業を省察することの意味・授業分析法について説明 ◆授業後 <ul style="list-style-type: none"> ◆提出された各種授業分析シート・リフレクションシートを印刷し、各教員に配布し、受講生の省察状況を把握 	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ (助手用配布資料作成) ◆模擬授業のねらいと流れを説明 ◆ビデオカメラに接続するマイクログの操作方法 ◆授業後にSDカードを情報処理センターへ渡す際の手続きの説明 ◆授業時 ◆ビデオカメラの操作方法等をサポート 	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ ◆e-ラーニングの閲覧方法について ◆フォルダ名、ファイル名の作成 ◆日程の連絡(授業日、SDカードの受け渡し方法など) ◆エンコード作業指示書の作成 ◆毎授業後 ◆エンコード終了の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ ◆e-ラーニングを活用するにあたりパソコン使用及びヘッドホンの貸し出し 	<ul style="list-style-type: none"> ◆事前打ち合わせ ◆ビデオカメラの貸し出し
模範授業			<ul style="list-style-type: none"> ◆前期に教育実習へ行った学生の学習指導案を集めて製本し、図書館に配置 	<ul style="list-style-type: none"> ◆e-ラーニングで活用するためのヘッドホン購入(教務課対応) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業づくりをするための教室の提供、授業づくりに必要な物品の購入・貸し出し 	
環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ◆課題への取り組み方の指導 ◆学習指導案を作成するための資料の集め方についての説明 ◆参考図書を紹介 ◆図書館にある製本された学習指導案の活用の方についての説明 		<ul style="list-style-type: none"> ◆授業の省察をしやすい環境をつくる(e-ラーニングを活用) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業づくりをしやすい環境をつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業づくりをしやすい環境をつくる 	
連携の意図とその役割	<ul style="list-style-type: none"> ◆授業づくりの理論と実践を結びつけるようにする ◆各回の授業のねらいと進め方を共通認識した上で授業を進められるようにする 					

2) マイクロティーチングについて

模擬授業では、多くの受講者が教師役を経験するために、50分の授業を「はじめ」「なか」「まとめ」の3人で教師役を担当する形式にした。しかし、それでも約1/4の受講者しか教師役を経験することができない。そこで、全員に教師役を経験する機会を保証するために、3分間のマイクロティーチング⁽²⁾を実施した(シーデントップ, 1988; 小松崎, 2010)。1クラス約80人を10人ずつ×8つのグループに分け、グループごとに教師役、ビデオ撮影役、生徒役を担当した。

2. 模擬授業に関する改善点

1) クラス分けの変更

2009年度は、「保健体育科教育法Ⅱ」と「教育実践研究」の各科目のクラス分けが異なっていた。そのため、教育実践研究で提出された各種授業分析シート・リフレクションシートを保健体育科教育法Ⅱで返却す

るたびに、分け直す必要があった。そこで、2010年度にクラス分けを同じにすることで、この問題点を解消した。

2) 授業実践の回数の変更

2009年度は、マイクロティーチングは1回、授業研究は3回であった。1回でも多く教師役の機会を保証する必要があるとの判断から、2010年度は、マイクロティーチングを2回に増やした。また、保健体育科教育法Ⅱで、体育施設の割り当てが一部可能になったため、新たにマイクロティーチングを前期に2回位置づけた(表4)。夏休みに、教育実践研究の課題として教育実習先へ体育授業見学に行くことを課題としており、その前にマイクロティーチングを実施することで、自分の課題を明確に持った上で取り組めるようにした。また、前期に保健体育科教育法Ⅱで経験することで、後期の教育実践研究での授業進行がスムーズに実施できるようになった。

表4 授業づくりのステップからみた仕組み・手だて (1学生あたりの授業回数)

		2008年度	2009年度	2010年度
教育実践研究	マイクロティーチング	0	1 (10月)	2 (9月)
	模擬授業	1 (11月)	3 (10～12月)	3 (10～12月)
保健体育科教育法Ⅱ	マイクロティーチング	0	0	2 (7月)

※授業回数(授業実施時期)

3. 「e-ラーニング」を活用することの有効性

1) アンケート結果の集計

表5は、アンケート結果を集計したものである(問1, 問2, 問3-1)。問1「授業を振り返るために、授業映像を見ることは有効だと思いますか」に対して、「有効だと思う」と回答したのは、2009年度は97.0%、2010年度は98.8%であった。そのうち、問2「今回、実際にe-ラーニングを活用して授業映像を視聴した」と回答したのは、2009年度75.6%、2010年度84.0%であった。

これより、授業時間外の学びとしてe-ラーニングを活用することは可能であるといえる。ただ、授業映

像を見ることは有効だと思いながらも、実際に視聴しなかった学生もおり、「閲覧できる環境を工夫してほしい」との声があった。今回はe-ラーニングで映像を視聴できる環境を肖像権に配慮して学内LANにつながっているパソコンからのみに限定していたが、今後はパスワード管理で学外からも閲覧できる等の工夫も検討する余地がある。

問2で「授業映像を視聴した」と回答した人のうち、問3-1「授業映像を視聴して新たに気づいたことや発見したことはありましたか」に対して「あった」と回答したのは、2009年度89.7%、2010年度は96.6%であった。これより、授業映像を視聴することは、授業を省察する方法として意味のあるものといえる。

表5 「e-ラーニング」に関するアンケートの集計

問1「授業を振り返るために、授業映像を見ることは有効だと思いますか」			
	有効だと思う	有効だと思わない	無回答
2009年度	262 / 270 (97.0%)	3 / 270 (1.1%)	5 / 270 (1.9%)
2010年度	241 / 244 (98.8%)	1 / 244 (0.4%)	2 / 244 (0.8%)

問2「今回、実際にe-ラーニングを活用して授業映像を視聴しましたか」			
	視聴した	視聴しなかった	無回答
2009年度	204 / 270 (75.6%)	66 / 270 (24.4%)	0 / 270 (0.0%)
2010年度	205 / 244 (84.0%)	37 / 244 (15.2%)	2 / 244 (0.8%)

問3-1「授業映像を視聴して新たに気づいたことや発見したことはありましたか」			
	気づいたことや発見した	気づいたことや発見しなかった	無回答
2009年度	183 / 204 (89.7%)	19 / 204 (9.3%)	2 / 204 (1.0%)
2010年度	198 / 205 (96.6%)	6 / 205 (2.9%)	1 / 205 (0.5%)

2) 「新たに気づいたことや発見した内容」について (問3-2)

問3-1で「授業映像を視聴して新たに気づいたことや発見したことはあった」と回答した人に対して、問3-2ではその内容を自由記述させる形式であった。その記述内容を設定したカテゴリーごとに分類した結果、「A 学習内容」「B 授業展開」「C 教師行動」に関する記述のうち、いずれも「C 教師行動」に関する内容が多かった(2009年度62.8%, 2010年度58.3%)(表6)。さらにCを6つのカテゴリーごとに分類した結果、教師の相互作用行動観察法で分析する「a インターアクション」に関する記述は全体の約20%であり、インターアクションをする上で欠かせない機能を持つ「d モニタリング」は約7%、期間記録法に関連する「b マネジメント・c インストラクション」は約10%であった。これらにより、評価観点の理解の深まり、観察の焦点が定まってきたことが「C 教師行動」に関する記述の多さにつながったと考えられる。

また、「f 学習者への理解」は「教師が演示をしているときに見ていない生徒がいたり、教師が見えていないところでの生徒の活動がよくわかった」「生徒の様子をじっくり観察できるため、どのようにすれば生

徒が上達できるのかについて分かりやすかった」「授業は『教師対クラス』ではなく、『教師対生徒1人1人』であるという意識を高めなければならないと思った」等の記述が見られ、いずれも15%前後を示した。

「D 全体」のうち、映像で視聴することによる「g 新たな発見」は20%弱で、「授業映像を見ることで、授業中はある一部分しか見えていなかったことに気づいた」「授業を生徒として受けている時には気づかないことも、教師の視点でビデオを見直すと、良いところも悪いところも見えてきたのでよかった」等の記述がみられた。

「h 改善策」は10%弱であり、「私が教師だったらどのように展開していこうか、どのような声かけをすることができるか考えながら見ることができた」「映像を視聴するにあたり、気になったところは一時停止・巻き戻しができることから、問題を発見したらどうすればよいのか考えた」等の記述が見られた。これにより、授業映像をただ視聴するのではなく、気になったところを「一時停止」や「巻き戻し」をしながらかじりと見ること、課題を見つけ、その解決策を考えるという一連の作業をしていたことが読み取れる。

表6 「e-ラーニング」を通して気づきや発見したことに関する自由記述の集計

カテゴリー	2009年度		2010年度	
	記述数	(%)	記述数	(%)
A 学習内容	24	(4.6)	28	(4.6)
B 授業展開	32	(6.2)	53	(8.7)
C 教師行動	326	(62.8)	354	(58.3)
a インターアクション	104	(20.0)	104	(18.8)
b マネジメント	11	(2.1)	11	(2.5)
c インストラクション	51	(9.8)	51	(8.7)
d モニタリング	39	(7.5)	39	(6.4)
e 声の大きさ	30	(5.8)	30	(7.1)
f 学習者への理解	91	(17.5)	91	(14.8)
D 全体	137	(26.4)	172	(28.3)
g 新たな発見	100	(19.3)	100	(18.9)
h 改善策	37	(7.1)	37	(9.4)
計	519	(100.0)	607	(100.0)

4. 授業づくりを振り返って

「教育実践研究」での模擬授業をすべて終えた後、「保健体育科教育法Ⅱ」で各種分析シート：①観察役による期間記録法・相互作用行動観察法の結果（集計とそこから見える成果と課題）、および②教師役・観察役によるリフレクションシートを返却した。その上で、授業づくりのまとめを行った。「授業づくりを振り返って」の自由記述の中で、「他の人からみた自分の授業評価を受け取ることで自分の課題が明確になり、これからの授業に生かせるものになった」「期間記録法や相互作用行動観察法は、授業の振り返りだけではなく、授業を組み立てるシミュレーション段階でも使えると思う」「授業の振り返りの積み重ねによって、授業づくりの材料が増えていくと思う」「授業の振り返りは、何でも振り返ればよいということではなく、毎回の授業には『ねらい』があり、それを達成するためにどのような授業展開だったのかを振り返ることが重要だと分かった」等、授業を省察する意味を理解できていることがうかがえる。

ちなみに、これらの授業科目を受講した学生が、その後の教育実習でも同様の授業の省察を実践したことを述べている。「実習校の指導教諭が私の1週目と3週目の授業をビデオで撮影し、期間記録法を用いて分析してくれました。その結果、三週目の授業ではマネジメント時間が半分以下となり、運動学習場面を十分に確保できました。この記録によって、何がどうよく

なったのか、今後どのような授業展開を目指したらよいか目に見えて分かりました。今後もよりよい授業に近づくための資料として、活用していきたいです。」

これらにより、教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅱ」と「教育実践研究」との連携、附属施設（図書館、情報処理センター）との連携を図ることで、授業の省察内容が具体的になり、さらにはそれが次の授業づくりのステップにつながったといえる。このことから、今回の「授業の省察（分析・評価）」に重点を置いた模擬授業のシステムは、一定の成果があったといえる。今後は、模擬授業をより充実させていくために学内での連携をさらに深めるとともに、「e-ラーニング」を活用するにあたっては授業映像だけではなく、学習指導案や授業分析結果も含めてアップロードをするとともに、よい体育の授業づくりに向けたコンテンツ作成にも取り組んでいきたい。

Ⅳ. まとめ

本研究の目的は、「授業の省察（分析・評価）」に重点を置いた模擬授業のシステムを構築することであり、2009-2010年度にかけて取り組んだものである。具体的には、①教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅱ（講義形式）」と「教育実践研究（実践形式）」との連携を図るとともに、②e-ラーニングを活用した授業の省察の仕組みづくりを目指した。対象は、2009

年度は270名、2010年度244名であった。

その結果、次の諸点が明らかになった。

①教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅱ」と「教育実践研究」との連携を図ることで、授業を「(1) 設計」して「(2) 実践する」ことに加えて、「(3) 省察」を位置づけた授業づくりができるようになった。

②附属施設（図書館、情報処理センター）との連携を図ることで、授業づくりの充実が図れるようになった。

③授業の省察の方法として、「期間記録法」・「相互作用行動観察法」の組織的観察法や「リフレクションシート」に加えて、「e-ラーニング」を活用して授業映像を視聴することで授業に対して新たな気づきや発見につながり、省察に深まりがみられた。

以上により、教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅱ」と「教育実践研究」との連携、附属施設（図書館、情報処理センター）との連携を図ることで、授業の省察内容が具体的になり、それが授業づくりの次のステップにつながったといえる。このことから、「授業の省察（分析・評価）」に重点を置いた模擬授業のシステムの構築は、一定の成果があったといえる。

謝 辞

本研究は、平成21-22年度日本女子体育大学の共同研究費の補助を受けて実施したものである。本研究の一部は平成22年度日本女子体育大学第2回FD研修会において発表した。本研究を進めるにあたり、教育実践研究担当の先生方・助手の方々、教務課の方々、情報処理センターの方々、図書館の方々、皆様には多大なご協力を頂いたことに深く感謝申し上げます。

注

- (1) 体育授業の見学とは、教育実習の事前学習の1つとして位置づけており、学校における教師の仕事全般を対象とした手伝い・参観、生徒とのふれあい等も含まれる。
- (2) マイクロティーチングとは、特に指導技術に焦点を当てたトレーニングである。例えば、教師（役）が生徒に対してゲームのルールを説明したり、運動学習中にフィードバックをする等、体育授業中の特定の場面だけを想定したものである。1単位時間の模擬授業が幅広い観点から省察を行うことに対して、マイクロティーチングは教師行動が主たる振り返りの対象となる（小松崎、2010）。

文 献

- 長谷川悦示・岡出美則・高橋健夫（2001）大学における体育教師教育カリキュラムの検討—模擬授業による授業の実施能力および評価能力の養成—、スポーツ教育学研究第21回大会号、p.42.
- 長谷川悦示（2010）教師力を高める体育授業の省察：新版体育科教育学入門（高橋健夫、岡出美則、友添秀則、他編）、p.257-262、大修館書店、東京。
- 日野克弘（2002）教育実習生の体育授業における教師行動の特徴—特に「授業場面」と「教師の相互作用」の分析を通して、日本体育学会第53回大会号、p.597.
- 小松崎敏（2007）体育模擬授業におけるリフレクションおよび事後指導の有効性、スポーツ教育学研究第27回大会号、p.21.
- 小松崎敏（2010）模擬授業の意義と効果的な進め方：新版体育科教育学入門（高橋健夫、岡出美則、友添秀則、他編）、p.263-271、大修館書店、東京。
- 藏原三雪・酒井久実代・鬼澤陽子・廣田春香（2010）日本女子体育大学における教師像の探求と教職教育の実践的研究、第7回二階堂奨励研究・共同研究報告会。
- 藏原三雪・鬼澤陽子（2011）日本女子体育大学における体育科の教師教育の実践的研究、第8回二階堂奨励研究・共同研究報告会。
- 文部科学省（1997）新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第1次）、教育職員養成審議会答申。
- 文部科学省（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について、中央教育審議会答申、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/008.htm
- 文部科学省（2010）平成23年度公立学校教員採用選考試験の実施方法について。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/_icsFiles/afieldfile/2010/12/24/1300238_01.pdf
- 向山貴仁・山崎利夫（2002）実践的な保健体育教師の養成を目指した模擬授業の改革—鹿屋体育大学における平成12・13年度の取り組み—、体育科教育学研究18（2）：29-40.
- 鬼澤陽子・笹本重子・藏原三雪・湯澤芳貴（2009）「e-ラーニング」を活用した大学模擬授業の実践例—授業を省察する力の育成に向けて—、女子体育52（9）：32-37.
- 鬼澤陽子（2010）メディアデポを使用した授業の実例紹介、平成22年度日本女子体育大学第2回FD研修会。
- シーデントップ、D.：高橋健夫・鐘ヶ江淳一・岩田靖、他訳（1988）体育の教授技術、大修館書店、東京。
- 高橋健夫（2010）よい体育授業の条件：新版体育科教育学入門（高橋健夫、岡出美則、友添秀則、他編）、p.43-53、大修館書店、東京。

（平成23年9月12日受付）
（平成23年11月22日受理）